

事例4 単元「1000までの数」

まとまりをつくって数えたよ！

算数 第2学年

志賀町立高浜小学校・教諭

1 事例の概要

「わかった！できた！と実感できる算数の学習をめざす」ために、少人数授業に取り組んでいる。児童一人一人が主体的に学習に取り組み、自力解決や学び合いを通して、「わかった！できた！」と実感できる学習をめざす。そこで、「わかる、楽しい授業」を行うために、少人数授業を通して、算数的活動を取り入れた授業の工夫や個に応じた指導法の工夫、学習定着のための工夫、評価の工夫を行っている。特に、算数的活動の工夫では、「課題をつかむ」ための算数的活動や「自力解決する」ための算数的活動をコースに応じて工夫し、わかりやすい授業で算数の楽しさを実感させるような指導を心掛けている。

2 実践内容

(1) 単元の目標

1000までの数についてその表し方を理解し、数の概念について理解を深めるとともに、数を用いる能力を高める。

(2) 指導上の工夫点

指導法の工夫

- ・レディネステストを参考にして、習熟度別による少人数学習集団を編成した。
- ・学習の習熟に応じて、補充的な学習や発展的な学習などを取り入れ、個に応じたきめ細かな指導を行った。
- ・学習課題や展開の工夫により、児童一人一人の学習意欲を高め、基礎・基本の学力の定着を図った。

算数的活動の工夫

- ・身の回りのものを10や100のまとまりにして数える活動から、「100をこえる数」に関心を持たせ、数の表し方やしくみを調べていこうという意欲を高めた。
- ・具体的なイメージを通して数の概念を確かなものにするために、数の量感がわかる教具を用意したり、ゲームを通したりして、具体的に実感をともなってとらえさせていった。
- ・しっかりコースでは、数の概念を確かなものにするために、児童が操作しやすい計算棒を数える活動を取り入れた。
- ・チャレンジコースでは、数の量感がわかり、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるように、おはじき、計算棒、ペンギンの数を数える活動を取り入れた。

評価の工夫

- ・毎時間の評価規準を明確にし、評価シートを用いて学習中の様子、気づいた点や児童の変容などを記録した。
- ・評価を指導の振り返りとし、個に応じた指導や次の指導の改善に生かすようにした。
- ・児童は、次時のめあてを持ったり、自分自身を高めたりするために、自己評価カードに自己を振り返って記入したり、ノートに学習の振り返りを書いたりして自己評価を行った。
- ・友だちの考えを知ったり、互いに認め合ったりする機会を持つために相互評価をした。



B-1 単元構成

B-2 評価計画

3 指導の実際（第一次の1時）チャレンジコースの一部

学習活動	教師の働きかけと児童の反応	支援（ ）と評価（ ）
<p>3 学び合う。</p>	<p>数えた結果を発表しよう。</p> <p>計算棒は、10の束が23個できて、ばらが5本になったよ。</p> <p>ペンギンは、10ずつ囲んでいったら、23個囲めて、5羽余ったよ。</p> <p>おはじきも、10のまとまりが23個と、あと5個だったよ。</p> <p>10のまとまりがたくさんできたら、100のまとまりを作ったよ。</p> <p>100のまとまりが2個と、10のまとまりが3個と、ばらが5になったよ。</p> <p>分かりやすい数え方を見つけよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10や100のまとまりを作って数えると数えやすいよ。 ・10のまとまりがたくさんできたら100のまとまりを作るといいよ。 	<p>100をこえる数のものを工夫して数えようとしている。評価方法（観察）計算棒やおはじきなどを実際に数える活動を通して、たくさんの数を工夫して数える方法を見つけさせる。</p> <p>数え方について自由に話し合わせることにより、10のまとまりを作ればよいことに気づかせる。</p> <p>100の束は、10の束を10個集めればよいことを計算棒を使って理解させる。</p>

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果について

指導法の工夫

- ・習熟度別少人数授業を基本に、コースに応じた算数的活動や学習過程を工夫して授業を進めることで、個に応じたきめ細かな指導を行うことができた。
- ・アンケートの結果からも、授業がよく分かり、できる喜びを感じ、自信を持って学習を進めることができると回答した児童が増えてきた。

算数的活動の工夫

- ・それぞれのコースで具体物を操作したり、絵を数えたりする活動を通して、10や100のまとまりを作れば数えやすいことに気づき、数の量感をとらえさせることができた。
- ・コースに応じた算数的活動を工夫することにより、児童は楽しく活動しながら学習し、ねらいに迫ることができた。

評価の工夫

- ・評価規準を明確にし、評価シートに児童の到達度を記入することで、教師は児童の学習状況を把握し、個に応じた指導を考えたり、次時の授業の展開を考えたりすることができた。
- ・児童は、自己評価や相互評価をすることにより、学習に対する意欲が高まり、めあてを持って主体的に学習に取り組めるようになった。

(2) 課題について

指導と評価の一体化を図るために、日常的な評価のあり方、どのような場面で、どのような評価方法を用いるかなど、工夫を重ねる必要がある。評価をもとにしっかり検証し、次時の指導計画を立てることが大切である。